

第六節 近松・海音以外の作者と作品

竹本座の創立(貞享元年)から近松の世を去る迄(享保九年)の人形劇の大成時代(元祿時代)に於ける代表的の作者は言ふ迄もなく近松であつて、海音これに次ぎ、その他には殆んど取立てて言ふ程の作者もなかつた。故に二人の作品を研究すればそれで要は盡して居るのであるが、今序にこの二人以外の作者及び作品について一瞥を與へて置く。

先づ竹本座について見るに、初代義太夫が作曲して勾欄にかけたものが總計百三十五篇を下らず、その歿後近松の世を去る迄に更に三十一篇の新作上演があつたので、結局四十年間に新作上演したものは百六十六篇を下らない。この中、近松の作は少くとも百五篇はある。即ち約三分の二は近松の筆に成つた作といふことになる。その残り六十一篇中作者明かなものは極めて少數である。

即ち錦文流の、

本海道虎石

元祿十二年

傾城八花形 元祿十五年

高名大福帳 寶永元年

の三篇及び松田和吉の、

河内國姥火 正徳三年

佛御前扇車 享保七年（近松添削）

大塔宮囃鑑 享保八年（近松添削、出雲と合作）

及び竹田出雲の、

お吉
空月 櫻町昔名花

の七篇があるのみである。松田和吉と竹田出雲については後に述べる機会があるから、ここでは差當り、錦文流と田中千柳及び西澤一風について述べておく。

（1） 錦 文 流

彼の傳記は明かではないが、西鶴の門人で俳名を錦頂子といひ、座摩の社邊に住んでゐた。浮世草子の作者として知られ、その作に係るものに左の數種がある。

風流今兼好 寶永二年

棠大門屋敷 寶永二年

熊谷女編笠 寶永三年

當世乙女織 同

好色手柄話 〔女郎名寄草紙〕 寶永五年

本朝諸士百家記 〔諸士百家俗傳〕 寶永六年

徒然時世粧 享保六年

この中『棠大門屋敷』は淀屋辰五郎の事蹟を綴つたものとして、又、『熊谷女編笠』は近松の『堀川波鼓』の原據となつた作として共に世に知られて居る。淨瑠璃作者としては當時櫻塚西吟・西澤一風と共に淨瑠璃文者三傑（四天王―海音・出雲・文耕堂・宗輔）と言はれたもので、前記の三篇の外になほ次の諸作がある。

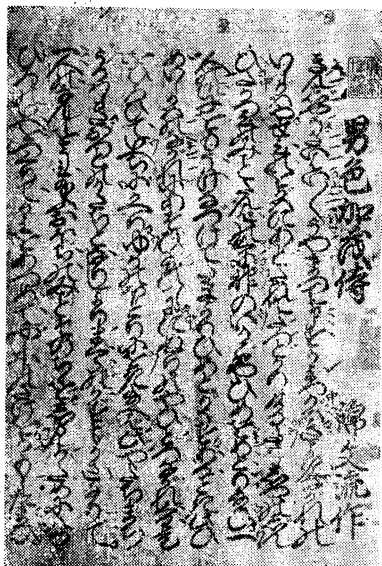
國仙野手柄日記 〔信濃掾今文彌正本〕 元祿十三四年頃の作 出羽掾座

男色加茂侍 寶永三年？ 豐竹座

仁德天皇萬年車 正徳三年 豐竹座

西行法師墨染櫻 享保元年 豐竹座

熊野權現烏牛王 享保四年 豊竹座



丁初「侍茂加色男」

本祕傳丸』に「今は出羽の作者」として錦文流を出してあるのを見れば、上記の外にもまだ作があつたことと思はれる。

なほ、ここに挿んでおきたいのは、作者不明の作品のことである。竹本座上演の作中、作者不明のものが五十餘段に及ぶが、その中には或は西吟や只丸などの作もあつたかも知れないと思ふが確證を得ないし、また近松の筆に成りつつも正本の署名なき爲、埋れて居るものもあらうと想像される。今其等の作中注目すべきものを左に列舉して置く。

『國仙野手柄日記』は國姓爺戯曲の嚆矢であつて、近松の『國性爺合戦』の第五段の吳三桂の竹筒に蜜蜂を籠める謀計の如きは既に此作に用ゐられて居る。その外で彼の作中比較的佳作といふべきは元祿期の『本海道虎石』、『傾城八花形』などであつて、

後になるほど作が劣るやうに思はれる。『竹

自然居士

元祿三年 近松か

雪女

元祿五年 同

都富士

元祿六年 同

ひら假名太平記

同 同

弱法師

元祿七年

佐藤忠信廿日正月

元祿九年

當麻中將姫

同 年

那須與一小櫻威

元祿十年

新板腰越狀

同

小野道風

元祿十一年

義經東六法

同

大福神社考

義太夫正本 元祿十四年迄

大友眞鳥

同

三井寺狂女

法隆寺開帳

信田小太郎

信濃源氏木曾物語

富貴曾我 元祿十五年

道中評判敵討 同

甲賀三郎 寶永元年「諏訪本地兼家」の系統

悅賀樂平太 同

神託栗萬石 寶永二年

田村將軍初觀音

以上の諸作は或は詩材を謠曲にかり、或は古淨瑠璃を巧に改作し、或は古典を活用し、或は材を當代の出來事に取りなどとして、相當に整つた作意を示す上に、その文辭亦同時代の近松作に比肩し得るものすら少からざるを以て、その過半は近松の作と推定する人もあるが、さうなれば、全部を認める方がよいやうなことになるかと考へられるので、積極的の證據の出るまでは、作者不明として研究の餘地となすべきものではなからうかと思ふ。

轉じて豐竹座の方を見るに、その創始時代には海音以外には、井上播磨その他の古淨瑠璃の正本を流用して居たやうに思はれるが、正本の所傳がないから、どの程度に手を入れられたかを知ることが出来ない。而して海音以外では、前に掲げた錦文流の作が三篇あるが、これは取出して言ふ程のものではない。其の他で注意すべきは田中千柳である。

(2) 田中千柳と西澤一風

この人も亦傳記は明かでないが、その作品として知られて居るものは左の通りである。

井筒屋源六戀寒暄 享保八年七月

建仁寺供養 同 十一月

賴政追善芝 同 九年二月

女蟬丸 同 十月

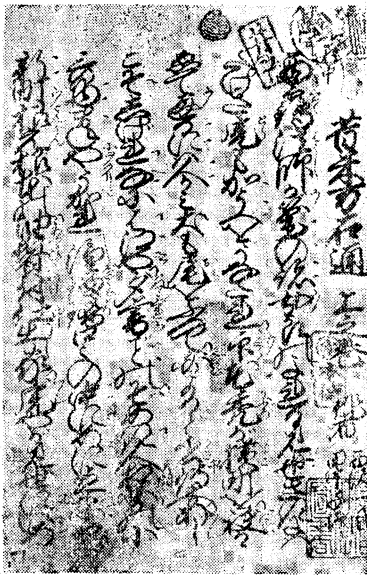
昔米萬石通 同 十年正月

南北軍問答 同 三月

身替弓張月 同 五月

大佛殿萬代礎 同 十月

この中『井筒屋源六戀寒晒』は『外題年鑑』（明和板）に元祿十六年正月上場とあるが、寛政板『外題年鑑』に享保八年と訂正したるのみならず、西澤一風の『當世榮花物語』にも同年七月六日豊竹座初日とあるのによつてその上場日附は明かである。これは元祿末年頃大阪で名高かつた井筒屋源六といふせいき散賣の賣藥行商を材題として、この賣子となりし播州の侍佐々木源太兵衛の子源六と、主君の愛妾らんと密通事件に基づく世話悲劇を仕組んだものであつて、近松・海音以外の世話物としては頗る注目すべく、殊に海音の『傾城思升屋』などに似通ひたる作意である。『建仁寺供養』はお家騷動物であり、『頼政追善芝』は、筑後掾の正本で近松



丁 初「通石萬米昔」

の作かといはれる『源三位頼政』の改作であり、『女蟬丸』は近松の『蟬丸』の翻案で、豊竹座の新築祝ひの祝言淨瑠璃であつたが不當りであつたし、『身替弓張月』も亦『忠臣身替物語』の改作であり、また『大佛殿萬代礎』は、近松の『出世景清』と後の『壇の浦兜軍記』との中間に立つものであり、

『昔米萬石通』も亦、『壽の門松』を承けて、後の『双蝶々曲輪日記』の原據をなす作として注目すべきである。然るに千柳の作はいつも不當りであつた爲に、遂に自ら豊竹座の作者を辭して享保十年の末に上京した。今日まで動もすればこの田中千柳と後の並木千柳とを混同して居るが、それは誤謬であつて、並木千柳は並木宗輔が竹本座の作者となつた場合の名乗であつて決して同人ではない。

兎角此の作者と太夫元との相性あしきかと不審に思ふ折ふし、作者の方より隙を乞ひ、淨瑠璃不作なる故斯成名とげて身退くは天の道と心得、三十石に夢を結び都の方へ歸られしとなり。

千柳が上野少掾の作者としては不適任であつたといふ意味を、右のやうに評したのは『操年代記』の記事であるが、面白い事には、その著作者たる西澤一風は、實は上記千柳の作八篇のすべての合作者として名を署して居る人であることである。思ふに一風は當代に於ける豊竹座の古老であり、且又、文藝壇上の先輩格として紀海音が隱退後は、その正本に作者として名を掲げつつも實際の作は千柳に一任したものであつたらう。彼は千柳が上京した翌年、並木宗輔・安田蛙文との合作で、『北條時頼記』(享保十一年)を作つて上演し、これが豊竹座空前の大當りとなり、その後彼は作者としては正本に名を署さずして、宗助・蛙文のみの作が上場されるやうに

なり、それから六年目の享保十六年五月六十七歳で歿したのである。元來一風は通稱を西澤九左衛門と云ひ、大阪上久寶寺町三丁目に住んで元祿末年から浮世草子や其他の書物を出版したが、享保十年頃には心齋橋南四丁目に移轉した。豊竹座の正本は全部彼の手で出版されて居る上に、竹本座の方の段物や、もぢり物なども出して居る。彼はかく淨瑠璃作者として、又出版業者として働いたよりは、更に重大な仕事としては浮世草子の作者としての活動であつたことはここに贅言する迄もない。この外で彼の著作として注意すべきは『今昔操年代記』(享保十一年刊)であつて、操淨瑠璃の變遷を知る上に於てよい資料となる著述である。

〔編者註〕 なほ、淨瑠璃作者としての西澤一風については『近世演劇考説』又は『近世日本藝能記』を参照せられたい。